

報告

一般社団法人 日本リハビリテーション工学協会関西支部第3回セミナー 『車椅子の昨日・今日・明日 ～パーソナル・モビリティの進化と暮らしの変化～』

川村義肢株式会社 平岡 諒

1. はじめに

「車椅子の昨日・今日・明日～パーソナル・モビリティの進化と暮らしの変化～」をテーマにして行われた今回の日本リハ工学協会関西支部／車いす SIG／乗り物 SIG 合同セミナーでは、「車椅子の昨日・今日・明日」についてそれぞれ熱くご講演頂き車椅子の過去から現在を学び車椅子の可能性について考える会となっており聴講させて頂いたため報告する。

2. 過去

過去の日本では、路面環境や様々な規制から車輪の発展が海外に比べて遅れていたが、1800年頃に西洋の車椅子らしき物が見られ始め、明治2年には西洋式の車椅子を発見し1900年代では機能だけでなくデザインも考えられるようになった。

3. 現在

現在の車椅子ユーザーの生活状況を見直すと、移乗時に問題を生じる事が多い。このように車椅子ユーザーの生活状況と車椅子でできる事を見比べることにより改善点が表れ、直すことで進化していく。しかし、いくら車椅子が良い乗り物になろうが解決できない問題点として「制度面での規制」がある。今後の課題として「制度面での規制」を改善していく必要性を示唆した。

4. 未来

一方「規制」にとらわれない車椅子を紹介すると、デザイン×走破性に着目した「WHILL (図1)」が挙げられる。「WHILL」は、外見的なデザインだけでな

く、ユーザーの姿勢をデザインしている事、特徴的な車輪によって悪路を走破できる事、マウスのようなコントローラーによって滑らかな操作性が特徴である。本来車椅子とは、車椅子無しでは移動できない方を対象としているが、この「WHILL」はすべての人が乗ってみたいと駆り立てられるような魅力が感じられる「パーソナルモビリティ」であった。



図1 WHILL

5. まとめ

最後に、障がいを抱えている方は私たちが考えているよりも深く、細かなニーズを抱えている。講演の中で株式会社 OX エンジニアリングの故石井重行前社長の言葉として「夢を見せる事がどんなに残酷な事かわかっているのか」と紹介されたが、「夢」に終わらせず創造していくには過去から現在を学び普段の生活の中でどのような所に困っているのかを明確にし、最後まで熱意を持って物づくりに繋げていかなければならない。同時に海外で使用できて日本では使用できないといった現状を打破する事が今後パーソナル・モビリティを普及させる上で肝心なのではないかと感じた。

川村義肢株式会社

〒574-0064 大阪府大東市御領 1-12-1